

謹奏者は先づ内殿に参拝して神官のお秋いを受けられた後本能寺一岡本旭村・粟津の露一穂師旭富◆常陸丸一中谷瀧島◆加藤清正一細川旭穂の前奏に続いて鴨川の露一荒木旭媛◆舟弁慶一植村實水◆五條橋一梅原旭濤◆湖水渡り一田中鵬水◆白虎隊一馬場鳴水◆屋島の誉一牧南水◆筑後川一矢吹旭美津◆叢雲一山岡旭清、以上(順不同) 献奏を終り冷房のよく利いた控室で神社提供の神酒で乾盃、目出度く本年の行事を終った。(プログラム中相良旭蟬、坂本一峰、平井春嶺、古谷寛水、水内媛水の五氏は病氣又は事故のため欠演。)

京都琵琶協会八月定例茶話会  
八月七日(日)昼一時会員田中鵬水氏宅。出席者伊吹正陽、馬場鳴水、田中、梅原旭濤、矢吹旭美津、安住旭康、牧南水、古谷寛水、齋師旭富、平井春嶺、植村實水。冷房の利いた広い座敷で一同くつろぎつつ、高松城一田中◆加藤清正一穂師◆城山一牧◆白虎隊一馬場◆吹雪の敵一伊吹◆老蘇の森一平井、以上研究演奏。そのあと秋の演奏会の相談などをしてビールで乾盃し夕食を共にして七時散会。

筑前琵琶演奏会  
八月二十八日(日)昼京都東山安井金比羅会館。琵琶三美会主催。(次号詳報)  
ラヂオ琵琶放送  
○七月二十一日(木)十五時十分NHK・FM

大物の浦一柴田旭堂、敦盛一山崎旭幸両女史。  
○八月四日(木)同、俊寛一石坂鶴朋氏、外に詩吟、和歌朗詠五題(琴、尺八伴奏)

予告

- 京都琵琶協会九月定例茶話会 九月十一日(日)昼一時本部平井春嶺氏宅。
- 晴風会例会 九月十七日(出)夕五時東京杉並区高円寺会館、主催浅野晴風氏。
- 藤巻旭鴻四十五周年記念演奏会 九月十八日(日)昼東京丸の内大手町農協ホール。
- 故鈴木鉦次郎氏三回忌追悼法要 九月二十四日(出)正午東京文京区駒込吉祥寺本堂。
- 琵琶楽コンクール 九月二十五日(日)十一時一十七時半東京銀座六丁目交詢社ホール、主催日本琵琶協会の後継問題は常々本紙でも提唱している通りで全く同感である。筑前琵琶界では幼、少、青年層のお弟子さんも多少育成されているようであるがその他は寡聞にして余り耳にしない。思いを五十年後百年後に馳せて折角の世界に誇る伝統芸能琵琶を衰微させぬよう若くは後継者の養成に力を注ぐことは焦眉の急務であろう。
- 筑前琵琶橋会全国大会 十月二十二、三(出)両日北九州市戸畑地区、橋会司会。
- 筑前琵琶協会全国大会 十月二十八、九(出)両日神戸市県民小劇場、司会神港旭会。
- 秋季琵琶奉納大会 九月十一日(日)昼一時大阪堺市開口(あぐち)神社(泉州秋の三大祭の一つ)。大阪琵琶同好会主催。

あごと

暦の上では既に立秋も過ぎたといふのにこの頃の連日の残暑は相変らず酷しい、謹んで愛読者各位の御健勝を祈る。今年の夏は近年にない酷暑をはじめ各地で三十何度という日が幾日も幾日も……では全くやり切れない。本号縮切時分の様子ではいつになつたら秋のそよ風が訪づれるのかと思つて強い残暑は退却しないが、本号が手許に届く頃には余程楽になつていよう、夏の疲れが出ぬよう呉れ呉れも留意願いたい。暫く鳴りを沈めていた琵琶界も九月の声を聞けばそろそろ活気を取戻し爽秋の好季中はまた忙がしくなるう、結構なことである。本号所載の水藤五郎氏執筆中にうたわれている琵琶奏者の後継問題は常々本紙でも提唱している通りで全く同感である。筑前琵琶界では幼、少、青年層のお弟子さんも多少育成されているようであるがその他は寡聞にして余り耳にしない。思いを五十年後百年後に馳せて折角の世界に誇る伝統芸能琵琶を衰微させぬよう若くは後継者の養成に力を注ぐことは焦眉の急務であろう。

昭和五十二年九月一日発行(非売品)  
編集者 植村實水  
発行所 京 絃 社  
高槻市津之江北町一ノ二二三  
電話 〇七二六(七三六)〇五一番

琵琶 機関紙

京

絃

第二七九号 京絃社

続。私の音楽ノート(八)

若きにあらず



水藤五郎

芸の世界に於いて、若いと云うのは何才位迄をさすのでありましようか。

政治の例を挙げると、若手議員と称される人々は四十代の中端であり、当選回数、即ち経歴、地位等を加味してから、その様に評されるのでありましよう。

考えてみるに、単純に年令的老若のみからその人の社会的老若を決定し得ない現実があるのですから、政治世界に於ける老若も早計には決めかねることなのです。福田総理が明治三十八年生まれをもじって、三十八才の自称を表明していることは広く知られていますが、これを私たちは奇異な冗談と受けとっています。即ち、明治三十八年生まれの福田さんは七十二才、今日の平均寿命は男七十五、女七十七才であります。勿論、この平均寿命の計算方法にはいろいろと難点があつて、その数字を福田さんを始めとする、明治生まれの人に適用することは出来ないものであります。

この様に考えると、「人生五十年」と云う古言の一節が、如何なる意味を持つか問いたくなるのですが、この古言が今日に於いても充分生きている現実も我々は知っています。「男盛り」「女盛り」なる言葉を、今日あまり聞かなくなりました。それは、その盛りの年数が多様化したからでしょう。過去の様に、男盛りを四十代から五十余才、女盛りを何才と一律に決めてしまつたり、決められて

けれど、さりとて、七十五才から遠いものでないことも事実であります。さすれば、明治三十八年生まれ、七十二才の宰相が居ても不思議ではないのであります。今後の日本は高令化社会であると予想されています。その認識に立つならば、七十二才を三十八才と、ことさら転化することもないわけでは

米国のカータ大統領の比較に於いて、我が国の総理の年令に一喜一憂することもないわけでは

この様に考えると、「人生五十年」と云う古言の一節が、如何なる意味を持つか問いたくなるのですが、この古言が今日に於いても充分生きている現実も我々は知っています。「男盛り」「女盛り」なる言葉を、今日あまり聞かなくなりました。それは、その盛りの年数が多様化したからでしょう。過去の様に、男盛りを四十代から五十余才、女盛りを何才と一律に決めてしまつたり、決められて

しまったたりする時代は終わったのかも知れません。社会構造の変化に依る職場の多彩化、医術の進歩等、その理由となるものは無数にあります。四十代であっても力を発揮出来ない場合もあり、その理由が公害であつたり、交通災害であつたり、現代ならではの要因が考えられるのであります。この反面、六十代にある人々、特に女性の活躍などを見る折り、現代の力強さを感じるのであります。これ等の動きは一つの言葉で規定し得ない現実であります。

こゝ数年、世代交替が漸々に行なわれていく芸の世界では、若さと云うのがどの様なものなのでしょう。琵琶界の世代交替は極めて少ないのですが、その二つの要因を考えると、喜愛の感があります。その第一は新人の不足であります。その第二は長寿の方々の多数現在であります。前者の憂いに對し、後者の喜悅は異存のない処として、この構成図は将来の高令化日本の縮図とも思えるものであります。

若しこのまゝの構造がつづくのなら、二十数年後、近代琵琶は数人の伝承者を残して衰退してゆくのであります。八百年以前に登場し、室町後期に至る迄の二百年、多くの入々に迎えられた平曲は、その後江戸、明治大正、そして今日と、四百年を経て四人の伝承者と、数名の研究者を残す芸能となりました。これは力強い芸能である証拠でした。明治以来、百年余り近代琵琶は、数十

年の余命となりました。平曲よりは短命かも。この思いを深くしたのは、私の加わっている若手会の近況からであります。この若手琵琶人の会の同人の年令が次第に高くなってゆくのが現実です。これは天の理の示す処で、去年より今年、更に、と年令は高くなるのです。これに対して、「若手」の名称をどの様にするか問題になってきました。

同人十八人の内、四十代になる者が三人、三十代が五人、そして二十代が二人と云うのが構成図であります。この年令を評して、若手と称し得る見方と、そうでないと見る意見が存るでしょう。つまり、今日は多様化しているわけで、盛り、若手、共に決し得ないので、若手会解散の方針の是非も論じられていて、こゝで訴えたいこともその一つの道程なのであります。

今日、高令化社会を迎えることが判っているながら、マスコミはヤングと指向してゆきます。その反面、学歴は高令化して、大学から大学院、研究室と、かなり修学が長期化する傾向があります。医学では、三十迄修学、この二つの流れを横目に見て、私共は、自分等の立場を自決しなければならぬのでしよう。若いのか、盛りなのか、老成なのか、必要以上に虚言にはしらず、七十二才はそれなりに、四十代はそれなりに自分の位置を確認自稱すべきでしょう。

斯く云う私たちは「若手」なのか「さにあらず」か、決めかねているのです。それは、

後につづいてくる人々のいない現実があるからであります。長寿の人々を見て、後継者不足を感じて、相対的に「若い」のだと考える反面、既に若くないと云う現実をも踏まえなければならぬのであります。(未完)



西南戦争百年と現代(四)

征韓論政変の真相と西郷

田中彰

征韓派の下野によって内政のヘゲモニーを握った大久保は、半月後には内務省を創設し、長官の座についた。欧米で具(つぶ)さに見てきた内政の行方である。

しかし、この征韓論分裂の意味は重い。幕末から足並みをそろえてきた倒幕勢力が、ここで政府派と下野派に分かれたのだ。しかも下野派の一方には西郷があり、他方には板垣がいた。前者は士族反乱の道を歩み、後者は明治七年(一八七四)の民選議院設立建白書を機とする民権運動の道をきりひらく。

明治八年二月の大政會議は、大久保が、彼と溝(みぞ)を深めた木戸および下野民権派の板垣との妥協をはかるうとしたものだった。妥協点は漸次立憲政体をつくるというにあったが、実は大久保の対アジア政策推進の体政固めでもあったのだ。その年九月、江華島事

件はひきおこされている。このとき日本は、あのロシアに似せて、みずからをつくりはじめていたのである。

「力の政策こそが国際政治のすべてだ」といったビスマルクの声がそこにはあった。日朝修好条規(江華条約)締結に先立つ中国との交渉過程で、「アジア諸国は協力してヨーロッパに対抗しよう」という李鴻章に対し、駐清公使森有禮は、「国家の大事はいつれが強いからだ」と叫んでいる。そこには「脱亜入欧」をめざす「文明の日本」と「野蛮のアジア」という対比があった。「文明」が「野蛮」から、それを支配するのは当然だとする発想があった。

それはたんに対外政策のみではない。内においても「官」こそが「文明」の体現者であり、「民」は「野蛮」だとみていたのだ。しかし、その「官」に対する「民」の自覚は高まりつつあった。幕末維新期に「世直し」をかかげた民衆は、徴兵制・地租改正・学制などの諸政策に一揆やさまざまな抵抗で応えていた。そこへ士族反乱はおこり、民権運動が広がりはじめた。「竹槍でドンとつき出す二分五厘」一明治十年一月早々のこの地租率引き下げは、そうした状況に先手をうった大久保の農民慰撫策であり、士族と農民との分断策であった。そして二月、遂に西郷は「政府に尋問の廉これあり」として鹿児島に起ったのだ。この報を聞きや大久保は「不」幸中の幸い、ひそかに心中笑いを生ずる程だ

と。

ここには冷徹な政治の打算の論理がある。西南戦争とは、西郷がこの政治の論理に敗れたことを意味する。

それから百年。近代天皇制の支配者たちは大久保の後裔であった。対する被治者の側にはどこか西郷と似たものが、いつもあったのではないだろうか。西郷の国民的人気もそのことと無関係ではない。

いま、あらためて醒めた目で一世記前の日本をみつめると、そこには意外にまなましく現代が浮かび上ってくるように思えるのである。(完) 一北大教授・日本近代史

我が道を行く

六十五年(五一)

西郷 天風



兎に角、この太田座が開設以来、これ程大評判の催しはかつてなかった。しかも客席に溢れた多くの人々に聞こえるよう、窓の戸をはずし、木戸の入口も開放したその心意気など、ついぞ見たことも聞いたこともなかったと、従業員たちの噂もきかれた。

時は琵琶の最盛期いまだ衰えず、ひとたびそれを口にせんか、一にも二にも錦心師の石童丸であり、辺鄙な田舎町では直接その名人

芸に目見えるなどあり得ない筈なのに、錦心自らの出演と云うのだから、ひとかどの琵琶ファン達、此の機を逸せず馳せ参するのも当然のことで、勿論曲は石童丸であった。

水戸に於ても、初めて迎える錦心師への人氣は実に偉いもので、近郷近在から徒歩で集まるファンは、旧水戸城跡の一角にある茨城県公会堂前の土堤の樹根に座して、持参の弁当を喫しながら楽しげに開場を待つ集団や、お堀の土堤を散策しつつ今や遅しと入場を待ちわびる人々、或いはお堀の橋から公会堂前の広場に三々五々佇む群衆で、さしも広々とした空地も埋めつくさんばかり、開演時刻も既に迫れど入口の扉は開かれる様子もなく、群衆の怒号、動揺も只ならずとの情報に、驚いた私は音楽公園好文亭に於て国宝的絵画観賞中の錦心師一行と別れ一足先きに引返して、開場を阻む警察署に飛込めば、彼等は、主催の大日本琵琶国風会が公共事業なみの特別扱いであるとも知らず、興業届の不備を理由に、私の説明をも耳をかさぬ始末に、やむなく賛助員の警務部長官邸に直接電話する段となつて、慌てて入場許可の指令を出し、漸く開演時間にならぬと云う、きわどいいきさつもあって、今でもその時の印象は新たである。

「大日本琵琶国風会」の発足記念大会は、その後二ヶ月余の十一月に同じ公会堂で開催、小田原国尊の「乃木大将」、林龍山(後の龍山月)の「城山」、貴島桃源の「大楠公」、天風の「薄陽江」等で大好評を博し、爾来会

を重ねる毎に名声を揚げつつ、やがて社会指導団体との交渉を持つに至ったのも、時局柄の故だったろう。

それは兎も角、この国風会ではもう一人の名字を同人に迎える筈だった。それは吉村岳城師の先輩、鳳鳴会幹部の中山鳳岳師で、私の為には師となり兄となつて、よく歌詞の譜節や弾法の余韻などに指導の労を惜しまず、時には慈父の如き存在でもあった。それが国風会発足記念会後程なく鉄道事故で物故され、その年が改まってから計報に接した私は、久しい間失望の淵に沈む思いだった。

この中山師は昔の正絃会(島津長丸男爵が会長となり、文学博士福本日南氏を副会長に推して、薩摩琵琶本来の精神を世に止めることを目的とする極めて厳格な指導機関)の幹部で、私をその正絃会の会員に推薦の労をとった事はかつての稿で述べたが、その私が大とえ源天籟、或いは森田城南等と偽名を以てしても、琵琶劇映画に出演するとは問題たし、正絃会幹部の意向もあるもので今の内にやめるよう、若し琵琶師も活動写真の弁士同様只の芸人と見られては、我々正絃会の名誉にも拘わらぬおそれがあると中山師の意見もあった。しかし私はそれに反論した、我々薩摩琵琶師は、芸人仲間と見られるようなそんな品格のない芸術家ではないのです。現に、薩摩琵琶によって説明される場合、その映画が取るに足らぬ駄作であっても、立派な教材ともなり得る程強い感激を与える力を發揮する、寧ろ

世の識者は之を奨励し、この機を逸せず一般家庭の日常生活の中に布行すべく協力すべきではないでしょうか。でなければ折角国民育成に有益な琵琶も、時勢に取残されてしまふ不安を感じる、私はそうした信念のもとに努力してあるつもりで、たとえ正統会から除名されても、映画出演を続けるのが此道のため、忠実であるように思われる、と断言した。

それから数日後、銀座裡東豊玉河岸(今の東銀座)の豊多摩館に「孝女貞子」という実録映画に出演していたが、ある日曜日、昼の部が済んだ処へ面会の客があり、それが中山鳳岳師ら五人の正統会員だった。

「つれも満面に笑をたえながら、よかったです、よかったです、あんなにいいものは知らなかった。」

と絶賛のうちに、数日後の再会を約して別れ、四、五日後中山師から招かれた私は、初めて丸の内の巨大な赤煉丸の建物、東京駅中央口玄関右側の、かなり広い室内に案内された。そこは被服関係の事務室で、中山師はその課長だった。折よく同じ日、日鉄職員(今の国鉄)の大川鳳流先輩と談笑した。この日共に茶菓を喫しながら進められたのは、この日鉄には職員家族慰安用の映画フィルム数十本が倉庫に眠っている、その中には琵琶劇向きのものが相当あると思われる、折を見て選別し、琵琶劇として新しく生まれ変わるものがあるれば、我々も先頭に立って出演する。これこそ正に一挙兩得」とばかり、ミイラ取りがミイラになって気炎を吐いたが、惜しむべし、中山師はその希望の緒につく機もなく、鉄道事故でこの世を去ってしまった。

「茨木童子」

郡 惠一



「東寺の前を打過ぎて九條表にうって出て、羅生門を見渡せば、物すさまじく雨落ちて、俄かに吹き来る風の音に、駒も進まず高嘶(いなな)きし、身ぶるいしてこそ立ったりけれ...」

能「羅生門」の今まさにクライマックスに入らんとするシーンである。室町時代の末期、これまでは幽玄を専らとしてきた能楽に、「安宅」「舟弁慶」「江葉狩」などを物して劇的大衆性を加味した功勞者・観世小次郎信光(一四三五一—一五一六)が、平家物語に描き出された怪奇談と、羅城門に出没したとの鬼神伝説を寄りどころとして作品化したものである。

それは平安朝も末の頃、丹波の大江山に酒頭童子を退治した源頼光と四天王の面々が、ある春雨の宵、つれづれなるままに酒宴を催しているうち、平井保昌が、羅生門に鬼が棲むとの噂を語り始めた。

これを聞いた四天王の随一・渡辺綱は、その真偽を確かめるため供をもつれずに唯一騎、二條大宮を南下した。その夜明け、羅生門に

残暑御見舞

錦心流一水会  
琵琶を楽しむ会  
田中 欸水  
神戸市東灘区御影中町一ノ一四ノ五  
電話〇七八(八五一)一二六三番

辿りついた綱が、証拠の金札を壇上に立てかけ、帰らんとしたその刹那、突如あらわれ出た鬼神は綱の兜の鍔をつかんで引き戻そうとしたのである。だが、綱はその時少しも騒がず、太刀ふりかざして妖鬼と渡り合い、激闘の末、鬼の片腕を切り落とし、ここに彼は勇名を洛中洛外に轟かすに至るといったストーリーに外ならない。

を取返そうとしたが、遂に見破られ頼光に斬殺されてしまったというのである。

しかし能「羅生門」・「お伽草子」(羅生門)ともども、それらの主人公は鬼なり鬼神・牛鬼とあるだけで、まだ「茨木童子」という名称はどこにも現れて来ない。

それが江戸時代になると、「茨木童子出世の地は川辺郡東留松村にあり。土俗の伝に云う。往昔此所に於て土民一子を設く。生まれながらにして牙生え髪長く、眼光あって強盛なること成長の人に越したり。一簇懼怖して島下郡茨木村に捨てけり。干時、丹後の国千丈岳の強盗酒頭童子に拾われ養育せられ、成長の後彼が賊徒となつて丹波の国大江山の巖窟を守らしむ。」

江戸中期元禄十四年(一七〇一)摂津国に關する広範な意味での地誌「撰陽群談」が発刊され、ここに初めて「茨木童子」の名が、伝説とは云え歴然と現われて来るのである。

それは地元茨木に伝わる口碑伝承の地(現在の尼崎市)に生み捨てられた童子が、島下郡茨木村(現茨木市・高槻市の隣接市)の髮結床の夫婦に拾われ育てられて、家業を手伝っていたが、やがて鬼の本性をあらわして客の生血を吸いはじめた。

そうした或る時、附近の橋上から川面に写った自分の顔に双角、口の両端に牙が出ているのを認め、驚き恥じて屋内に引籠った。これを伝え聞いたのが大江山の首領酒頭童子、直ちに茨木に来てこの鬼子連れ帰りの

「茨木童子」と名付けて副首領に取り立てた。更に明治に入ると歌舞伎技術の最後の集大成者河竹黙阿弥により「茨木」と題する松羽目物の舞踊劇がものされて、明治十六年四月、東京新富座で初演されるに至った。尾上家の「新古演劇十種」中の当り芸で、綱の叔母真柴が実は茨木童子の化身だったとして、さきの能羅生門とお伽草子、それに撰陽群談などをミックスして作られ、「羅生門の鬼」

即ち茨木童子なりとの伝説が、天下にPRされるに及んだとも云えるだろう。童子の屋敷跡と貌(すがた)見の橋は現在茨木市新庄町に残っている。

(註)琵琶歌「羅生門」「茨木」「綱窟」

決死の耐寒行軍

八甲田山彷徨

辻 旭城

青森市は青函連絡船の汽笛とドラの音が鳴り響く本州と北の玄関口。やがて東北新幹線が開通すると、これまでの終着駅のイメージが大きく変わることだろう。

八月の初めともなれば、みちのくの短かい夏も終りをつけ、ねぶた祭が盛大に繰り広げられる。市内を、極彩色の張り子ねぶたと、

篁流 薩摩琵琶  
詩吟浜松吟詠会理事

柿 沢 篁 峰

〒435 浜松市安松町三三ノ四  
電話〇五三(六二)三五五四番

筑前琵琶師範  
神心流吟道総師範

中 島 旭 穂

〒602 京都市上京区堀川通榎木町東角  
電話〇七五(二二)四〇三三番

薩摩琵琶高昇流家元

泉勝院 峰 口 高 昇

〒604 京都市中京区高倉通丸太町下ル  
電話〇七五(二二)二〇八九番

吉 井 良 三

〒569 高槻市南総持寺町  
電話〇七二六(九六)八五一六番

巨大なまじよっぱり太鼓の勇壮な響きと、ゆかに花笠の踊り子たちで大賑わいを見せる。何としても青森に来れば、まづ訪づたいのが八甲田山と、十和田湖観光である。

琵琶歌「吹雪の敵」で歌われているように、明治三十七年(一九〇四)二月、日露戦争を前にした雪の八甲田踏破は、陸軍の耐寒訓練と装備の点検、それに万一の場合の八甲田山を経由する交通路の確保のためには避けて通れない道であり、弘前第八師団は所属する第五聯隊と、第三十一聯隊の二つの部隊にこれを命じた。

第三十一聯隊の徳島隊は、僅か二十数名の編成で弘前を出発、一方青森歩兵第五聯隊も師団からの命令により、神田隊が中隊会議の席上、ごく少数からなる精鋭の小編成を主張したが、大隊長山田少佐によって強く拒否され、結局二百数十名の中隊の編成という重荷を負わされるに至った。しかも今回の雪中八甲田山踏破強行軍については、山田大隊長も自ら士気を鼓舞する為めに参加するといふ。

踏破距離約五十キロ、ただ八甲田山を抜けるだけの神田隊の計画に対し、遠く十和田湖を迂回して八甲田山に入る蜿蜒二百四十キロにも及ぶ徳島隊に較べて、大隊長は見劣りするように思えたのであろう。体力の衰えをいうちに八甲田山に登る神田隊、それと裏腹に耐寒行軍を続けながら、八甲田山へ進軍する徳島隊であった。狂暴な大自然を征服せんとする二百四十余

名と、自然と折り合いをつけながら蕭々と進む二十数名、八甲田はそのどちらをも拒否するように思われた。

聯隊を出発してから二日目の一月二十五日には神田隊の二百数十名は百数十名に減り、飢えと寒さと幻覚に悩まされながら、吹雪の中でたぐ右往左往した。火気も食糧もなく、全員じっと立ちすくみ、そして力尽きた者は静かに崩れ、眠ったまま凍死した。この日、辛うじて命永らえたのは五十余名だけだった。辛うじて命永らえたのは五十余名だけだった。

明けて二十六日、それでも神田隊の三十余名は、昨夜と同じ形で吹雪の中に立っていた。そして当てもなく道なき山道を歩いた三十余名に対し、冬將軍の地吹雪は最後のとどめをさすかのように、物凄の一撃を加えてきた。叩きのめされた神田隊の兵たちは、次第に薄れゆく意識の底で、只無少に徳島隊の兵士たちと逢いたいと思った。

その頃、八甲田山麓で露営している徳島隊から、第三十一聯隊長へ次ぎのような電報が送られてきた。「マズザワヘトウチャク、ミヨウミメイ、ハツコウダサンヘムカウヨテイ、ナオトウチャクヨテイノ、五レンタイハ、イマダニソノスガタラミズ……。」

日時 昭和五十二年十月二日 十一時開場  
会場 名古屋市中小企業福祉会館  
錦心・筑前・薩摩各派

秋の琵琶名流公演

主催 阿部 勝 水  
後援 琵琶芸術同好会  
東西の大家  
中京にて妍を競う

言寸 (36)

大村益二郎 NHK・TV 大河ドラマ「花神」の主人公。兵部大輔として陸海軍を統率したが、明治二十一年一月京都木屋町小路の仮住居で刺された。遭難碑は佐久間象山と並んでいるが墓は伏見深草の当時の陸軍墓地。先斗町の芸者菊尾と結婚したが、これが後の神山男爵夫人万佐子である。

白い筈の吹雪が赤く見え、又黒く眼にうつって襲い続ける。徳島隊は、吹雪の中で永遠に眠る神田隊に逢った……と思った。

「八甲田で徳島さまに逢える、それだけが楽しみだと申しておりましたのに……。」と呻く神田夫人に、「いや、自分は間違ひなく吹雪の中の八甲田で逢った。」と、溢れる涙の中で徳島隊長は初めて泣いた。

五聯隊の生存者は山田少佐以下十二名。その後少佐は青森の陸軍病院で体力の回復を待っているうち、責任を痛感して拳銃で自殺。また全員無事生還した徳島大尉以下の雪中行軍隊は、その後日露戦争に出動して、全員名譽の戦死をしたという。終りにのみ、琵琶愛好の諸先生方、ぜひ現地を訪ねて英霊の冥福を祈って貰いたい。

平井志鳥(洲誠)

梵鐘や 落花は仮りの世なりとて  
散る花の 虚実相うつ水面かな  
雨二日、花の裏見てしまいいけり  
紫陽花の 毬を掌にもす散步道  
園児等に 紫陽花の毬りころがりそう  
遠雷の ころげくる風生まぬくし

柴田旭堂女史「琵琶の教科」発刊

柴田旭堂女史はこのほど宝塚歌劇団の中元清純氏との共著「へ五線譜による筑前琵琶教科本」琵琶の教科」を豊中市のミュージックセリエルから刊行された。本書は文字通り筑前琵琶に志す人の教科本として貴重な教科書で柴田女史の永年に亘る経験と実則に照らして苦心の末世に出されたもので田辺尚雄、吉川英史両先生の讃辞を始め作曲家の黛敏郎、東京芸大教授小泉文夫氏等も賞賛され画期的な著作書として推挙したい。(A4版、定価参千円)。

平井春嶺氏大阪新歌舞伎座に出演

京都の平井春嶺氏は七月一日より二十六日まで昼夜二回大阪新歌舞伎座の杉 良太郎公演の第二部唄と踊りのグランドショー全十景中第七景殺陣「黎明」に望月太明蔵社中と共に出演、杉 良太郎の男性的な立ち廻りに豪快な薩摩琵琶弾法を披露、迫力満点にて舞台効果を挙げ連日大好評を受けられた。

錦心流第八回関西新進演奏会

七月十七日(日)昼一時大阪天神朝陽会館、主催小川吟水氏。関西の新進数氏熱演の外東京、名古屋、京都、徳島などの名手六人ゲスト出演終始満員の盛況を呈した。金剛石吟水会員◆後寛(上)山田吟糸◆津白虎隊増田正和◆新撰組北村玄水◆巖流島金寄靖水◆石童丸小西雨水◆白虎隊中野、住田

◆詩吟静御前一菊地◆本能寺一村上、堀田◆川中島一岡本、内田、内田、可原◆羅生門一安江弘水◆鞍馬山一稲葉卓水、近藤登水、杭東詠水、中野淀水◆竜の口一尾山好水◆敦盛一内田欽水◆屋島の誉一阿部勝水◆元寇一平井春嶺◆湖水乗切一中山鳳水◆西郷隆盛一前田秋声◆恩讐の彼方へ一会主小川吟水。

一水会多摩支部七月例会

七月十七日(日)昼一時小金井市福祉会館。白虎隊一篠宮櫻水◆湖水乗切一工藤慈水◆鉢の木一石井效水◆石童丸一加藤錦陽◆景清一小川吐水◆桔梗の旗挙げ一伊藤馨水◆彰義隊一清水源城。以上熱演の後乾盃、六時半閉会。

祇園祭協賛琵琶奉納演奏会

日本三大祭の随一「京都祇園祭」後の祭りの前夜祭が七月二十三日(土)に営まれ同日夕五時から京都琵琶協会の協賛で東山八坂神社能楽殿に於て首記が開催された。これは協会年中行事の一つで過去二十数年間毎年この日に奉納して厳粛且つ華しい祇園祭に花を添えている。当日は本夏第一の暑さで三十五度四を記録したが能楽殿前にしつらえた天幕張りの聴衆席には十数台の床几を準備し数十人の琵琶ファンは定刻前から続々と詰めかけ終演の九時まで熱心に各流派琵琶の醍醐味に浸っていた。又拡声機から流れる幽幻な四絃五絃の妙味を境内各所に立ち止まって聴いていた人も多かった。